

文藝部春のリレー小説　〈交流会編〉

当文藝部では、あるツールを用いてリレー小説を作成し楽しむ事が多々あります。

このツールの特徴としては、

- ・タイトルを付ける方法が独特
- ・文章を書く際に、直前の人が書いた文章しか見ることができない

といったものが挙げられます。うまく情報を次の書き手にパスできるかが、攻略のカギとなってきます。

この度四月に行われた対面交流会でもそれを用いて、新入部員を交え新たな物語が生まれたようです。今回はその一部を特別に、新入生歓迎号の作品として公開しちやいます。サクッと読みやすい長さですので、是非お楽しみいただければと思います。

『労災建築会社』

うちの会社は余りにも不思議だ。労災を作り出すのだから。瞬間的に物理法則を捻じ曲げ、この世界のバランスを取っている。今日はその仕事を紹介していこう。

新東京第三都市のかつて渋谷だった場所の、人々の群れから三キロ程離れた小さなビルの二階に、うちの会社はある。世界各地の企業の工場で発生する日々の労災は、うちの会社の技術部が作り出しているのだ。それはつまり、**労災**によって金を稼ぐ人がいる。ということにもなる。

具体的な手段をここに記そう。

- ①工場に技術部職員を潜入させる。
- ②一定の期間労災が起きるか観察する。
- ③何も起きない場合、担当職員が自ら歯車に飛び込む。このようにして労災を起こす。

実は最近、労災を起こしながらない社員が増えているのだ。「怖いので無理です」「歯ぐるまにとびこむなんて正気ですか？」といったような具合で。これがN世代なのだろうか？

だから私は、N世代の次のR世代に期待している。情けない先代を見て、彼らは危機感を抱くはずだ。そうして労災を起こすはず。全てはこの世界のバランスのため。私の計画に狂いはないはずだ。

労災の後処理に追われるサラリーマンに同情し、労災を減らした先代のせいで、この会社は大赤字。会社復興を目指し、私が企む計画はこうだ。技術部の人間にツイッターをはじめさせる。すると彼らはレスバに夢中になり、仕事を忘れるだろう。すると労災の数が跳ね上がる。ついに実行に移す時だ。

計画は成功した。

しかし一つの重大な問題が残ってしまった。ツイッターが、広まりすぎてしまったことだ。

そのせいで、私たちは……。

会社をたたむことになってしまった。「労災建築会社」良い商売だと思つたんだがなあ……。まあなくなつたものは仕方がない。次は「人の不幸でつくる蜜養蜂所」でもつくるか。

終

『守護のまちかど』

この街には、そのたった一つの出入口を護る守護人がいる。非常に厳格で、その手にはいつも鋭い槍を握っている。その槍で何人の部外者をけちらしてきたのか、知るすべもない。いったい、その守護人とは、この街において、どんな存在なのだろう。

彼は眠らない。そしてこの街も。街にとつて守護人はトマトである。守護人にとつて街はトマトである。ここには野菜がある。とてもおいしい。

トマトが守護人選ばれた理由を知っているだろうか。実は最新の調査でトマトが一番嫌われている野菜だったからだ。ピーマンなど味が嫌われているものは大人になると克服できるが、トマトは食感が嫌われていた。

食感も食べ物において重要なのだ。だからこそ、嫌われ者のトマトが活躍できる。このまちかどを守り抜く。うってかわって使命感に満ちたトマトは、閑所で見張り業務に励む日々を過ごしていた。

守護人のトマトは苦労人であった。日々訪れる怪しい訪問客を、正確に見分け、街に入れるかどうか決めなければいけない。相手が武器を隠していることも少なくない。でも彼の仕事はこの街の住人の命を握っている。その彼の前に、とても美しく、そして妖精の様に儂げな女性が立っている。

背が高い。髪も長い。とても美しい。しかしここはまちかどだ。こんな所に人がいるはずはなかった。

「この街を守らねば」
私はその不審者相手に戦いを挑んだ。

まちかどでおこった戦いは筆舌に尽くし難いほど激しいものだった。あと純粹に僕はその人の顔を傷つけたくなかった。十分後、戦いの最中にその人は消えた。

「護れたのか……？ 僕は……」

それからというもの、僕の前にあの人が現れることはなかった。あの人が消えたという喪失感。逆説的だが、それだけがあの人がかつて「居た」ということを証明している。このまちかどを護り続ける。欠落を噛み締めながら、小さくとも確かな一歩を、私は歩み出すのだった。

終

『ゲームパン』

次世代型ハイブリッドゲーム！ ゲームとパンを組み合わせたゲームパン！ とうとう決勝戦を迎えました。戦うのはこの二人、では紹介していただきましょう。

一人目、赤コーナー。

短く切りそろえられたつややかな黒髪は、舞台を照らすスポットライトをはね返し、美しく輝いている。その眼に燃やすは闘志の炎、今か今かとその時を待っているのは、高校一年生、ミナミだ。

「ミナミのアネゴ、がんばレー！」

スタートの合図を待ち精神を集中しているなか、クソうるさい低音が地面を揺らす。時代と世界をマチガエたようなムツキムキなモヒカンからその声は出ていた。それを無視したミナミはスタートの爆発とともに一歩目を繰り出した。つややかな黒髪がスポットライトの光を跳ね返し一つの軌跡となって宙に描く。

空気を切り裂くように腕を振る。大地を震わす一歩で前へ走る。長い黒髪が線を描く。目標は未だ遠く、ず太い声援はミナミのはるか後方へ遠ざかる。

ミナミは手を伸ばす。まだ届かない——今は。汗が振り落ち、呼吸が喉を痛める。それでも足は速度を緩めず前へ出る。

目標まで五メートル、四メートル、三、二——

届いた。パンを握りつぶしそうになりながら掴み、ぶら下げるひもから引きちぎる。そしてパンを口にくわえ、さらに走る。あとは曲がり角であの少女とぶつかれば、ゲームはクリアだ。……よし、次の角だ！

角を曲がる。と体に振動が響く。ぶつかったっ……！ という気持ちと一緒にたおれる。僕が優勝だ。今までの努力が頭を走馬灯の様に駆け抜け、幸福な気持ちで目を開けた。目の前には鉄の女のような電柱が立っている。

短いようでいて、長かった。この景色を独り占めできる日が来るなんて、一体誰が想像できただろう。静かに頬を伝う涙が、自覚した途端に溢れ出す。

——良くやったね。頭の奥で、誰かが言った気がした。

『黄色いソーセージ』

大学生になると、一人ぐらしをするというのが我がせんざき家のおきてだ。私もそれにならって先週から一人ぐらしを始めた。両親はポンコツな私を心配してか、大量の仕送りダンボールを送ってきた。今週は片づけるだけになるほどダンボールを送ってきた。そのなかから例のものが出てきた。「黄色く変色したソーセージ」だ。今日は買い物できなかつたのでこれを夜めしにするしかない……。

黄色く変色した肉はやわらかく、発酵したかのように臭う。だが、ほのかに甘いこれは、あの果物に似ていた。

あの果物にするように、その肉のてっぺんをつまみ、ゆつくりと皮をむいていく。中から姿を現したのは、皮と同じく黄色い、しかし甘やかな香りを放つ、そう、まさに。

「……バナナ？」いや、しかし、皮のパリパリ感などはどう考えてもソーセージ。しかしガブリといくには勇気が要りすぎる。先の方だけいってみるか、と先端の火が通つてとろけだした部分に舌を当てた。

おそろおそろ熱いであろうバナナソーセージに舌を当てると不思議なことに冷たい。少しかじってみるとパリッとソーセージの皮が破ける。湯気が立っているが冷たいパリパリソーセージであった。

視覚で得る情報と、触覚で得る情報とがちぐはぐに混じり合い、己の脳を混乱させた。しかし、そのまま咀嚼を続ける。何かに浮かされるように、一心不乱に。危機感とやらはどうの昔にどこかへ行ってしまったようだった。——うまい、うまい、うまい、うまい。

自分の細胞一つ一つが歓喜する。咀嚼するたびに無限の幸福がわいてくる。理性も本能も飲み込んで身体全体が光り始める。星が舞い自室は宇宙となった。不思議と違和感はなかった。星を越え銀河となりくもになる。全てが光となった時、私は目覚めた。ここは自室、ソーセージは消え、残るのは大量のしおくりダンボールであった。口の中には何もなかった。

全ては幻覚だったのだろうか。ほのかに口の中に残る甘さも、全身にただよう全能感も。宇宙の真理に触れた気がした私は、それを確かめるべく大いなる一步を踏み出し……ずてんつ、と頭からこけ、意識を失った。その足元には、バナナの皮が一つ。